

ARM-JTAG を IAR EWARM で使用する場合の注意点

ARM-JTAG は、Macraigor の Wiggler 互換となっていますが、EWARM では、環境によってうまく動作しない場合があります。このような場合、H-JTAG を使用すると解決する場合があります。

■H-JTAG の入手先

次のリンクから、J-JTAG の最新版を入手します。

<http://www.hjtag.com/>

Cortex-M3 を使用する場合は、H-JTAG V0.7.0 BETA 以降が必要です。

H-JTAG の設定は、次の手順で行います。

- H-JTAG を入手したら、解凍して、インストールを行います。
- インストールすると、デスクトップに H-JTAG のショートカットが作成されます。
- パラレルポートに ARM-JTAG を接続し、ARM-JTAG をターゲットボードに接続して、ターゲットボードの電源を入れます。
- デスクトップのショートカットから、H-JTAG を起動します。ウィンドウ画面に、ターゲットのデバイスの名前が表示されたら、接続は完了です。デバイス名が表示されない場合は、Operation メニューから、Detect Target を選択します。
- それでも認識しない場合は、BIOS 設定の平行ポートを標準の平行ポート（ECP や EPP でなく）に設定して、上記の手順を再度繰り返します。

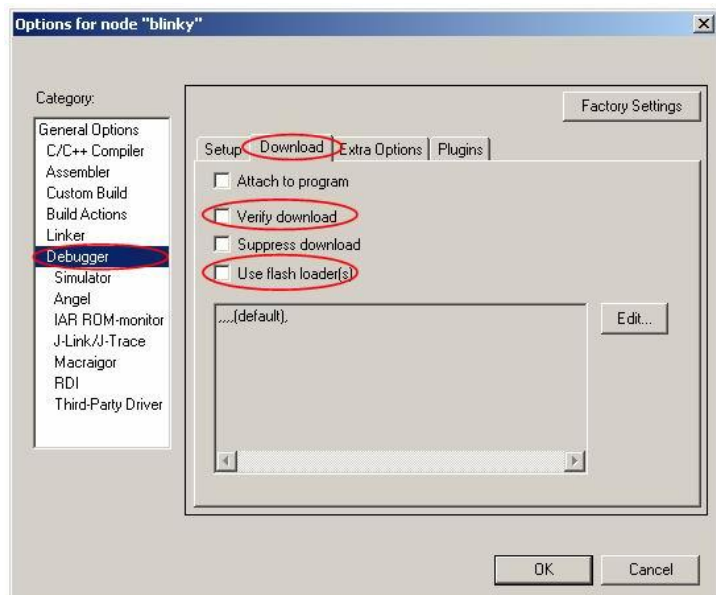
※CPU によっては、H-JTAG でサポートされていない場合がありますので、H-Flasher を起動して、デバイスの一覧を見るか、H-JTAG のページで、サポートデバイスを確認してください。

※フラッシュメモリへの書き込みだけであれば、H-Flasher でダウンロードすることができます。

■ EWARM での使用方法

EWARM で H-JTAG を使ってデバッグする場合は、次の手順で設定を行います。

- デバッグするプロジェクトを起動する
- オプションメニューを開き、Debugger の Setup タブで、Driver に RDI を設定する
- Auto flash download を使用する際は、Download タブで、Use Flash loader のチェックを外します。



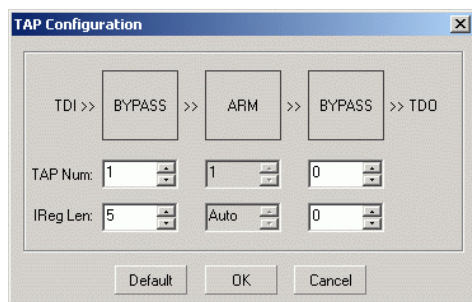
- オプションの RDI を選択して、“Manufacture RDI Driver”に、H-JTAG.dll を設定する。
このファイルは、通常は、C:\Program Files\H-JTAG にインストールされています。

以上の設定で、H-JTAG を使ったデバッグが可能になります。

■ CORTEX-M3 を使用する場合の注意

CORTEX-M3 を使用する場合は、以下の点に注意してください。

- IAR EWARM は、v5.11 以降を使用してください
- H-JTAG を起動して、Setting メニューの TAP Configuration を以下のように設定します。



以上